

(1) 装備の目方を少しでも軽くしようとした拳句の果てに・・

(1995 年、穂高連峰・奥又白谷 A 沢の恐怖)

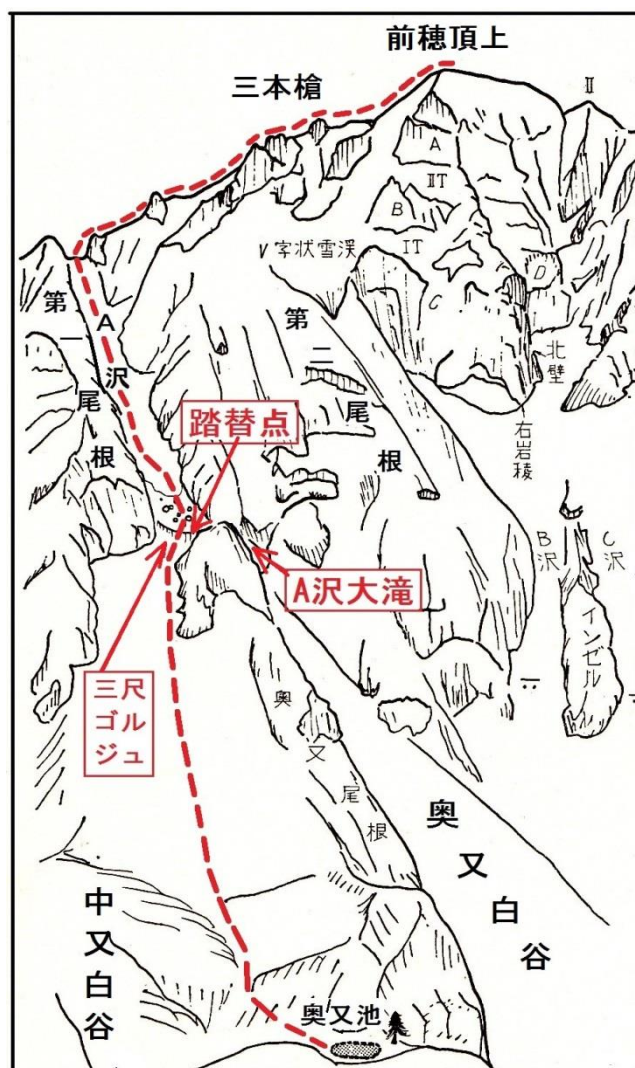
井上靖の「氷壁」の舞台となった前穂高岳東壁。今でも幾多のクライマーを引き付けてやまないが、そのクライミングのベースとなっているのが徳澤園対岸の天上の楽園「奥又白ノ池」である。近年はキャンプ禁止となっているが、かつてはクライマーのメッカであった。奥又白ノ池は、徳澤から往復する人が殆どで、前穂頂上方面へ抜ける人は殆どいない。

もう 20 年も前の夏のこと、奥穂高岳から飛騨側に下って笠ヶ岳に登ったことがあった。いつもの濁沢経由では能が無いので、奥又白谷から前穂を越えて奥穂に出ることにした。単独の幕営山行の悲しさ、荷物が重く、1mg でもザックを軽くしたいと苦心した。当時は荷物を軽くするためには装備の一つ一つをグラム単位で軽量化することが肝心だという説が流行っていて、私もそれに倣ってあれこれ軽量化してみた。金物はそうでなくても重いので、アイゼンは 12 本爪ではなく 6 本爪の軽アイゼンで何とか誤魔化すことにした。

さて、奥又白ノ池から前穂山頂に抜けるには、池から中又白谷を源頭部まで登り、通称三尺ゴルジュという狭いゴルジュを抜けて踏替点と呼ばれる狭いコルから奥又白谷の A 沢と呼ばれる雪渓に取りつくのである。この雪渓はコンベックス（上側に凸）型の急雪渓で、取り付くにも苦勞したが、いざ取り付いて雪渓の上に這い上がってからが一層の地獄となった。

斜面が余りにも急なために雪渓の下方には何も見えず、^{またぐら}股間の間から見えるの空間ばかりであったが、雪渓の下には A 沢の大滝と呼ばれる大蛇が口を開いて待っている筈である。荷物は重いし、腐った雪には 6 本爪ではアイゼンの爪が全く利かず、今にも滑落しそうになってきた。心ノ臓はパクパク波打ち、足も震えだし、腰もヘナヘナになってきた。

これはイケナイ！！ アイゼンが効いていない靴はズルズルと滑り始めた。このままだと足が滑って A 沢の大滝に吸い込まれて大蛇の餌食になってしまう！！ 滝までは高距 100 メートルはある。たぶん骨は粉々に砕け、肉は飛び散って襦袢布のような状態になるであろう。重いザックを担いでいるので滑落停止をする余裕も無く体が跳ね飛ばされてバウンドしながら落下していくことだろう。我ながらその姿が脳裏を掠めた。必死になってピッケルのピックを雪渓に打ち込み、それに右手でぶら下がって、



もう一方の左手はそこに偶々できていたスプーンカットを押さえつけた。ザックを背負った蛙が壁に叩きつけられた格好となった。神サマ、仏さま、キリシト様、オカアちゃん、誰でもよいから助けてくれ！！

足でも手でもちょっとでも動かすと、滑り落ちそうで身動きができない。怖くて怖くて御叱呼をチビッてしまった。4本の手足のうち、3本を固定しておいて徐々に1本だけを移動させて雪溪端のベルクシュレントに逃げ込みたいのだが、唯一の支点となっているピッケルのピックを抜いて移動させることができない。20kg 超のザックを担ぎ、蛙が叩きつけられたような腹這いになって、同じ姿勢でジットしていると、段々と手足が疲労してきて我慢できなくなってきた。ダブルアックスがあれば何とかなるのだが、今更そのようなことを考えてみても何の役にも立たない。

こうなったら、座して最期を待つよりも、いちかばちかやってみるしかない。左手をしっかりと雪溪の窪みで支えておいて、右手でピックを抜いて少し左側に再度打ち込んだ。ピックを抜く時、足が震えて滑り落ちそうになったが、必死の思いで我慢した。このような尺取虫の苦行を何回繰り返したのだろうか。何とか雪溪端のベルクシュレントに滑り込んだ。ヤレヤレ、これで助かった。本当にホッとした。

しかし、ベルクシュレントの中は滑落の心配は無くなった代わりに、側壁からの落石頻々、アイゼンを外している足元に頭ほどの落石が音も無く飛んできて雪堤にめり込んで止まった。左足の横 30 ㌢程の所であった。神の僥倖に感謝したが、心ノ臓が凍りついた。狭いシュレントの中の濡れた逆層の岩場を落石に怯えながら這うようにして何とか急な雪溪を登り終えた時は、僅か 100 メートルのほど下の踏替点から 4 時間が経っていた。この後、^{ほうほう}這這の体で明神尾根の稜線を辿って前穂高岳から奥穂高岳の頂上を通り、奥穂の小屋に辿り着いた。天場も満杯で一人用のテントさえ張る場所が無く、岩がゴロゴロしている狭い空き地にやっとテントの半身だけを張った。小屋で缶ビールを買ってはみたが、一口も胃が受け付けなかった。

1 2 本爪と 6 本爪のアイゼンのたった数百グラムの重さの差をケチったばかりに、ひどい目に遇った。今でもこの時の恐怖は、会社でイジメられていた時の悪夢と一緒に夢に見るから、よほど怖かったのであろう。家人の話では、時々真夜中に奇声を発しているそうだ。

滑落していたら必ず彼岸に渡っていたであろう遭難事故寸前の、何ともお粗末な一節でした。

【教訓＝身の安全を確保するための装備は、いくら重いからといって、これを蔑ろにしてはいけない】

(本稿 完)

[「怖かった山々」目次に戻る](#)